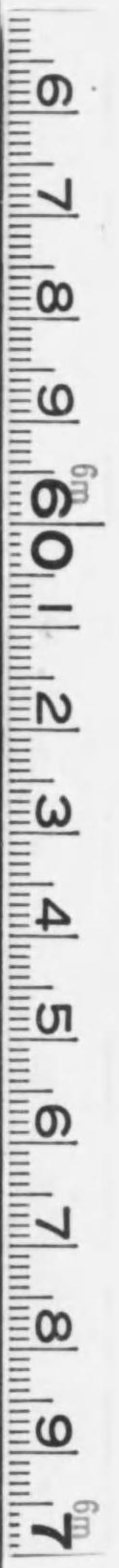
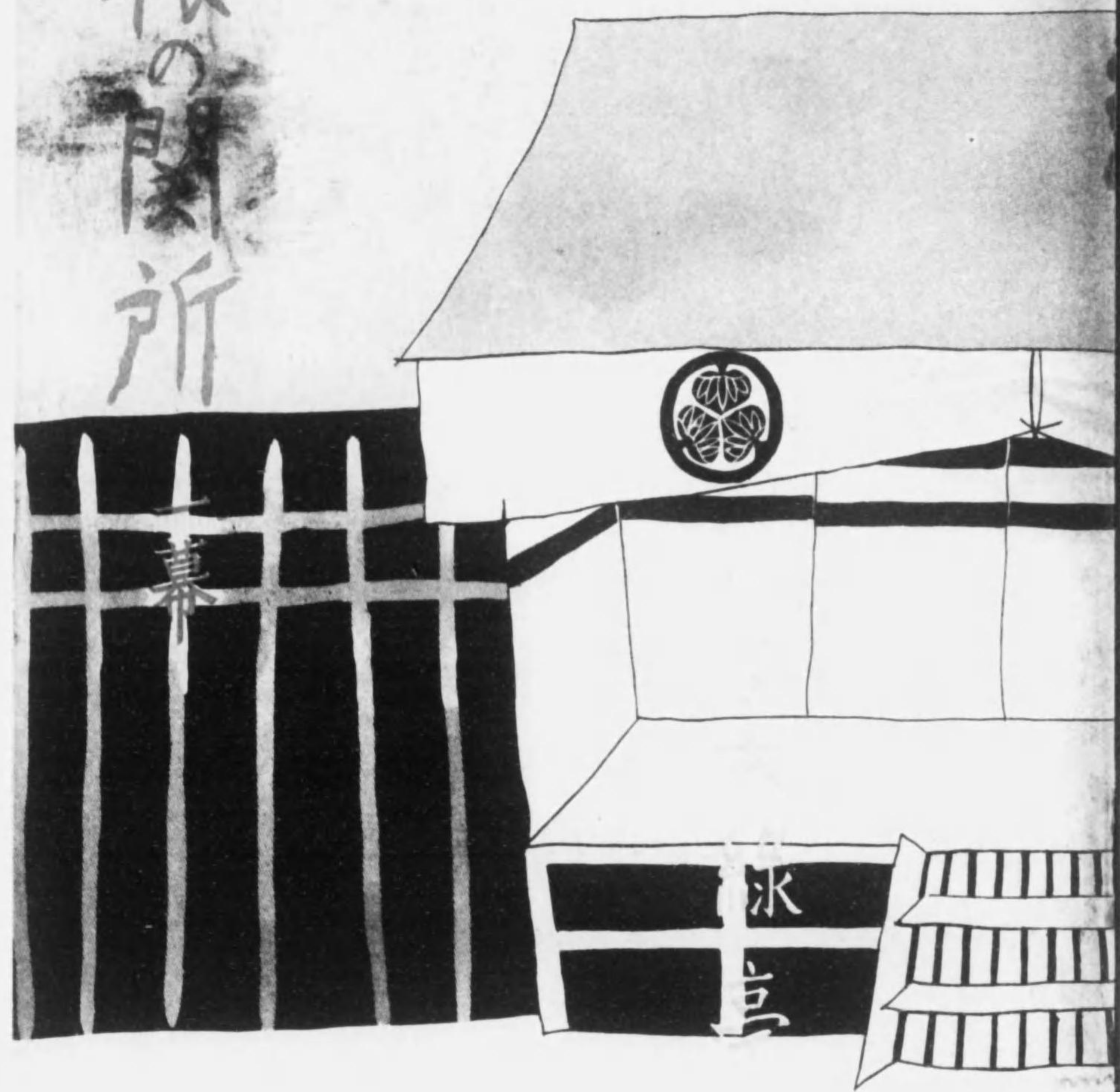


特 253

379

相根の関所



始





特253  
379

清水三重三畫伯挿畫並ニ装幀

はしがき



狂言の趣原は諷刺でありませんが喜劇の一形式として室町時代に能の間劇として行はれ、後歌舞伎狂言の稱が起つてからこれと區別する爲に「能狂言」と云はれるに至りました。

概ね世間日常の可笑的な事件を脚色したもので諧謔を旨とし諷刺的で平民的であつた爲に、大いに大衆に歡迎せられその發達もいちじるしいものでした。しかし凡てが榮枯盛衰の道を辿らねばならぬ様に「能狂言」もその後ある一部に公開せらるゝのみで今日に及びました。然るに近時歐米の文化陶酔より歐米物質精神の弊を脱し、國體再認識、國粹發揚の氣運隆興し、此「能狂言」も次第に普及し且つ狂言特有の明朗性が現代人の心弦に融合し歡迎せらるゝに至りました。

私は私の最も愛する兒童にこの明朗な「狂言」をお贈りすべく筆を執りましたが、何分にも古風なこの「狂言」には云ひ現はせない典雅な味が難解な古語と交叉し兒童には稍もすれば折角の興味を削ぐ懼が多くありますので、なるべく「狂言」の味を損はないやう學校劇に適するやう明朗且つ教育的に



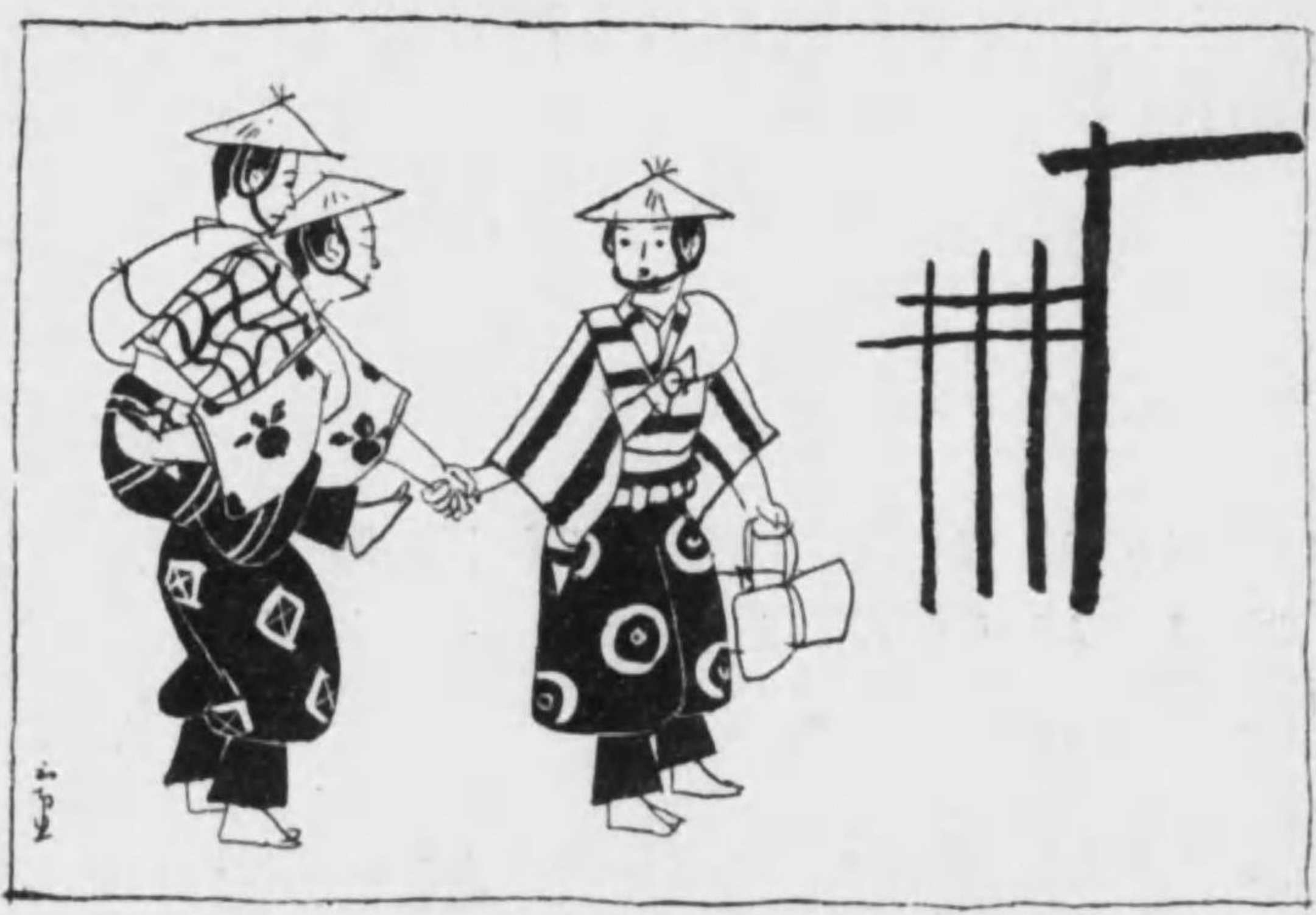


改作しました。幸ひに父兄、先生方の適當なる御盡力により私は私の最も愛する兒童がこの日本精神の洋溢して居る「能狂言」の演出される日を樂しみに致します。

終りに、私のこの企に對して御賛同下された盛林堂主林甲子太郎氏に厚く感謝の意を表する次第であります。

昭和十年十一月 明治節の日に

著者識



能狂言兒童劇 第三編

# 箱根の關所

一幕

佐々木 綠亭作

舞臺

時 元祿のある時代

所 箱根の關所

右手に紋所を打つた幕を張つた役人の控所がある、椅子机などを置いてある、一段高いところに役人頭の席がある、左手に能舞臺風の老松を描く。



登場人物

關守之頭 關所の役人頭

關太郎太夫 家來

關次郎太夫 家來

關三郎太夫 家來

三吉 仔馬の馬子

偽盲 江戸の商人

偽啞 江戸の佛師

偽鬻 江戸の藝人

旅人

浪人

其他唱歌隊多數

◇開幕◇

(關守之頭 立派な袴に袴をつけ上手より堂々として然も能が、り風に足を擦るやうにして登場。「右向け」の動作にて正面客席の方に向く)

守之頭

エヘン、罷り出てたる某はこの日本一の箱根の關所の役人頭關

守之頭と申す者で御座る。當今は世の中誠に物騒にて豊臣の殘

黨全く根絶致さず、ひそかに天下の浪人と氣脈を通じ何事をか

企てんとし、又彼の由井正雪なる者徳川の天下を倒さんと誠に

不届な陰謀に及びしが事幸ひ發覺して未然に防ぎしも世の中は

全く緊張を要する時で御座る。されば幕府より厳しき通達有之

通り、手形の有無にか、はらず少しでも怪しき者は嚴重に取調

を致せとの事で御座る。されば我等もその旨を心得て、注意に

注意をしてこの關所を守つて御座る。どうれ、然らば席に就き



役目を司らうと存ずる。(二段高き自席に就く)

(太郎太夫 袴に袴を着用し下手より能がよりにてやはり擦り足にて登場)

太郎太夫 拙者は守之頭殿の家來にて當關所の役人で御座る、姓名は太郎

太夫と申す者で御座る。(守之頭に一禮して下の段の席につく)

(次郎太夫・三郎太夫 續いてやはり能がよりで太郎太夫同様の動作で登場)

次郎太夫 拙者はその又家來の役人次郎太夫で御座る。

三郎太夫 拙者はその又々家來の役人三郎太夫で御座る。

(二人とも守之頭に一禮して席につく)

守之頭 何んと各々、毎度申す如く充分注意に注意を致して。

一同 確と此大事な關所を守る所存で御座りまする。

守之頭 (やゝ語をやはらげて) だがな各々。

一同 ハ、ハツ。(平伏する)

守之頭 法にも裏表と申す事も御座る。怪しき者はどしどし充分詮議を

してよろしいが、病人及不具者などは特別の情を以て臨機應變の處置をとつてよろしからう。

太郎太夫 ハ、ハツ、いつも乍ら殿様のお情深い御計らひには恐入つて御座ります。

次郎太夫 下々の民の如何ばかりの喜びかと存じ上げまする。

三郎太夫 徳川の天下も皆殿様の様な御方のお役人が御座れば益々榮へる事と存じまする。

守之頭 はア、大分某の評判がいゝやうぢやのう、一つ其方達に御馳走でも致さうかのう。

一同 (朗かに) ハ、ハツ。

(守之頭は暫し役所の帳簿のやうなものを見てゐたが、何か急に用事でも出来



たのか

守之頭 皆の者、某一寸用事が御座る故他所へ参る。されば先程も申し  
た通り充分と注意をして役目を守つて貰ひ度い。

一 同 ハ、ハツ、心得ました。

守之頭 (立上り) それでは頼むぞ、御免ツ。(退場)

太郎太夫 何といふ情深い殿様だらう、のう各々。

次郎太夫 全くて御座る、御自分が用事を思ひ出したやうにして退出なさ  
れ、我々を氣樂にして下さるあの志、涙がこぼれます。

三郎太夫 左様々々、されば我々も一段と仕事に勵がつくと申すもの……。

太郎太夫 時にちや、今日は通行人はあまりないやうぢやのう各々。

次郎太夫 左様で御座る。この退屈をまぎらす爲何か藝人でも通らぬもの  
かしら。

三郎太夫 左様々々、何か藝でもやらして見たいもので御座る。

(馬子の鈴の音遠くより聞へて来る)

太郎太夫 (耳をすまして) お、馬子の鈴の音が聞へて参つたやうで御座る。

次郎太夫 左様々々、されば馬子の三吉かな。

三郎太夫 あの孝行者の感心な三吉で御座らう、もう間もなくこれへ参つ  
たやうで御座る。

—— 少し間 ——

(三吉 被衣に腹掛け、きりゝ鉢巻をする——比較的小さい兒童が扮する、馬  
はボール紙にて馬の形や首の形を切り抜いて冠る、下手より馬を曳いて登場、  
舞臺の端の方にて——兒童は二人にて四本脚とし體になる)

三 吉 お役人様今日は、馬子の三吉で御座ります。今日も又山里村  
までの使ひで歸りみちで御座ります。お役人様、どうぞこゝ



を通して下さりませ。

太郎太夫

お、馬子の三吉か、其方いつも精が出るのう、感心な奴ぢや。

次郎太夫

親孝行で全く感心な奴で御座る、のみならず誠に唄も上手で尙感心で御座る。

三郎太夫

左様々々、誠に唄の上手な奴ぢや、のう三吉。

三吉

恐入りまする、さうおほめに預かる程親孝行でもなければ唄も上手で御座いませぬ。

太郎太夫

さう謙遜するな、時に三吉、お前の唄を聞くのが身共達の樂しみぢや、どうだ又一つ唄つて聞かしてくれまいか。

次郎太夫

左様々々、是非一つ唄つてくれ。

三郎太夫

今歸り途ぢやらう、さう手間はとらせん、一つ唄つてくれ。

三吉

頭を掻いて困りましたなア、でもお役人様の仰ゆえ一つ唄つて見

まする。

太郎太夫

うむ、承知してくれるか、頼むぞ。

三吉

かしこまりました。お寺の和尚さんが私を唄つてくれました童謡で御座いまするが、ちよいと自分の事を唄ふので變て御座りますが、勘辨して下さいませ。

次郎太夫

何んでもよろしいのぢや。

三吉

では唄ひまする。

◎仔馬の馬子

仔馬の馬子さん

可愛い馬子

仔馬のお鈴は

黄金の鈴



遠いお使ひ

かへりみち

とんく峠に

鈴が鳴る

シヤラリコシヤンく

シヤンくシヤラリコ

鈴が鳴る

七つ八つ山

日がくれて

九つこの山

暗くなる

とんがりお山に

月が出て

とんく峠に

鈴が鳴る

シヤラリコシヤンく

シヤンくシヤラリコ

鈴が鳴る

馬子は馬子唄

星月夜

仔馬ぼかく

揺れる影



夜の山みち

かへりみち

とんく峠に

鈴が鳴る

シヤラリコシヤンく

シヤンくシヤラリコ

鈴が鳴る

三吉 (唄終つてべつこり頓首する) 之が昨日和尚さんから教つたばかりでほ

んたうにうまく唄へませんので御座ります、どうぞ御勘辨をお願ひ致しまする。

一 同 (拍手して) うまいく、上手ぢやく。

次郎太夫 三吉、その方は唄の天才ぢやのう。

三郎太夫 さうぢや、全くうまいものぢや、

三吉 (恐縮したやうに) 下手で恐入りまする。

太郎太夫 今度また唄ふて呉やれよ、大儀ぢやつた。(懐中よりいくらかの金を取

出して紙に包み三吉の方へ差出して) 三吉之は少々ぢやがその方の唄の

駄賃ぢや、老いた母親に何か買ふてやつてくれ。

三吉 これはくお役人様毎度有難う存じまするが、此度は御辭退いたしまする。

次郎太夫 いやく賞ふて置け、其方の孝心を賞て、上役殿より下さるの

ぢや、頂戴して置くがよいぞ、

三吉 さやうで御座りますか、それでは頂いて参ります。

三郎太夫 氣をつけて参れよ。



三吉有難う存じます、左様なら。(退場)

少し間

(旅人 振分け着物で足こしらへも充分に下手出入口より登場、舞臺端にて)

旅人 私(わたし)は京(きやう)へ上(あ)る旅(たび)人(びと)で御(ご)座(ざ)る。こゝは天(てん)下(か)の難(なん)所(じよ)箱(はこ)根(ね)の關(せき)所(じよ)、ど  
うれ通(とほ)り手(て)形(がた)を出(だ)して通(とほ)して貰(もら)ひませうわい。(手(て)形(がた)を出(だ)し、關(せき)所(じよ)近(ぢか)く  
進(すす)んで頓(とん)首(くび)再(さい)拜(はい)して)お願(ねが)ひ申(まを)します、どうぞお通(とほ)しを願(ねが)ひまする。

太郎(たろう)太(た)夫(と) うむ、旅(たび)人(びと)か、その方(かた)は何(なに)れ(れ)の者(もの)で何(なに)れ(れ)へ參(まゐ)るのぢや。

旅(たび)人(びと) 江(え)戸(と)の者(もの)で京(きやう)都(と)の方(かた)へ見(み)物(ぶつ)に參(まゐ)る者(もの)で御(ご)座(ざ)りま

次(つぎ)郎(らう)太(た)夫(と) 何(なに)ぢや、京(きやう)都(と)の方(かた)とは怪(あや)しからん、行(い)方(かた)を(を)はつきり申(まを)せ、何(なん)

だか其(その)方(かた)は怪(あや)しい、其(その)方(かた)は「ごまのはい」ではないか。

旅(たび)人(びと) 冗(じやう)談(だん)仰(おほ)言(ごん)つては困(こま)ります、この通(とほ)り手(て)形(がた)を持(も)つて居(ゐ)りまする。

三(さん)郎(らう)太(た)夫(と) (それを見(み)て)うむ、通(とほ)り手(て)形(がた)を持(も)つてゐるな、ごまのはいではなさ

さうぢや、よろしい、通(とほ)れ〜、

旅(たび)人(びと) 有(あ)難(なん)う存(ぞん)じます。(二(に)禮(れい)して退(たい)場(じやう))

少し間

(浪(なみの)人(びと) 黒(くろ)の紋(もん)付(け)に袴(はかま) 大(おほ)小(こ)を佩(ひ)し編(あ)笠(がさ)を冠(かぶり)下(した)手(て)出(で)入(い)口(ぐち)より肩(かた)で風(かぜ)を切(き)つて

威(い)張(は)つて登(のぼ)場(じやう) 舞(ま)臺(たい)端(はた)に立(た)つて)

浪(なみの)人(びと) エヘン〜、罷(ま)り出(い)でたる天(てん)下(か)の豪(ごう)傑(けつ)で御(ご)座(ざ)る。姓(せい)名(な)の儀(ぎ)は大(おほ)  
法(はふ)螺(ら)吹(ふ)右(みぎ)工(く)門(かど)と申(まを)し、拙(ちよ)者(もの)の先(せん)祖(そ)は彼(か)の劔(けん)聖(せい)宮(みや)本(もと)武(ぶ)藏(ざう)で御(ご)座(ざ)る。  
されば拙(ちよ)者(もの)も劔(けん)を持(も)つては元(もと)より天(てん)下(か)無(む)敵(てき)で御(ご)座(ざ)るゆえ、あち  
らの大(おほ)名(な)、こちらの大(おほ)名(な)も召(め)抱(か)え度(た)きとの事(こと)にて、毎(まい)日(にち)々(々)う  
るさ申(まを)してたまらんで御(ご)座(ざ)る。されど拙(ちよ)者(もの)は一(いっ)萬(まん)石(いし)、二(に)萬(まん)石(いし)位(ぐら)  
の小(こ)祿(ろく)高(たか)で身(み)を縛(しば)られるが厭(いと)で御(ご)座(ざ)る。自(じ)由(ゆう)の體(たい)で天(てん)下(か)を威(い)張(は)  
つて歩(あ)行(かう)するの(の)が誠(まこと)に吞(の)氣(き)で氣(き)樂(らく)で御(ご)座(ざ)る、然(しか)し氣(き)樂(らく)ゆえに貧(ひん)



乏で困るが、武士は喰はねど高楊子で御座る、アハ、ハ、ハ、こ  
こは天下の箱根の關所か、手形はないが、どうれ一つ役人共を  
吹き飛ばして通らうか。つか／＼役人の方に近づき大聲でエヘン／＼、  
頼まう／＼。

太郎太夫

これ／＼、こゝを何と心得る。

浪人

箱根の關所ぢやらう。

次郎太夫

威猛高になつてこれ理屈をいふ奴ぢや、天下の關所と知つてゐる  
なら手形を見せろ。

浪人

アハ、ハ、ハ、拙者の手で御座るか、ははア、豪傑の手を見たい  
と申さるゝか、手をぬつとさしのべてさアゆつくり御覽下されい、豪  
傑の手はこんなものぢや、強さうぢやらう、アハ、ハ、ハ、

三郎太夫

大聲に叱つてこらッ、何を申す不届者奴、そんな汚い手を誰が見

せろといふた。

太郎太夫

我々役人を愚弄致すのか！ 失禮千萬

次郎太夫

(怒つて) 不届な事を申すと手は見せんぞ。

浪人

アハ、ハ、ハ、手は見せん、そちらで見せんでも、拙者先程より  
見せ居るではないか。

太郎太夫

(大いに怒つて) 云はして置けばつけ上り失禮千萬な奴、その分には  
捨て置かんぞ。

浪人

アハ、ハ、ハ、捨て置かんと申すか、之は面白い、天下の浪人大  
法螺吹右工門を知らぬのか。

次郎太夫

大法螺吹右工門？ そんな瘠せ浪人誰が知る者か、たわけ者奴  
アハ、ハ、ハ、たわけとはよくいふた、拙者は元よりぢや、田も

浪人

わけ、山をわけ、日本全國いたる處武者修行して歩いた者ぢや。



太郎太夫

(突然笑つて同役をかへり見て)何と各々、之なる浪人は見受ける處誇大  
盲想狂と稱へる一種の氣狂ぢやよ、アハ、、、

次郎太夫

アハ、、、成程、さう仰言ればどうも最前より申す事が變て  
御座る。

三郎太夫

アハ、、、全くて御座る。氣狂に構ふても仕方ない事ぢや。  
左様々々、之れく氣狂ひ浪人、その方精神病らしき者故、格

太郎太夫

別の思召しを以て許してつかはす、早うこの關所を通れ。  
(同意)有難く心得ろ。

浪人

天下の豪傑たる拙者を氣狂ひ扱ひとは怪しからん。然し關所を  
通れと申すならば通ふてつかはす、エヘンく。(威張つて關所を通つ  
て舞臺左端に行き)アハ、、、關所は無事に通つたが、氣狂扱ひに  
されるとは残念千萬、大法螺吹右工門近頃失敗で御座る。何は

ともあれ、お腹が空いて御座る。あの峠の茶屋へ急いで參らう。  
(威張つて退場)

(役人達は書見をして退屈をしのいでゐる)

少しの間

(首座、たつかけ袴を用ひ元祿小袖風の着物を着用して打連れて下手出入口  
より登場、舞臺端に立つて)

佛師

身共は江戸の佛師で御座る。佛様を彫刻するのが業で御座るが、  
誠に仕事は嫌ひで怠け者で御座る。それに研究心もなければ少  
しも技術が進歩致さず、下手な佛師、怠け者よと評判されて御  
座る。されば日々に仕事に暇になり益々貧乏致して御座る故、  
迎も江戸には居られず、此度思ひ立つて上方の方へでも行つた  
ら、身共の如き下手な佛師でも何かよき仕事でもあらんと存じ



商人

是まで参つて御座るが、さて困つた事には、こゝは天下の箱根の關所、生憎手形を持つて居らず誠に困却仕つて御座る、困つて御座る。(腕組をして困つた様に考へ込む)  
身共も矢張り江戸の商人で御座る。親代々譲られた商法を眞面目に守つて居ればよきものを、僅かばかりの利益はつまらぬとの考へを一時に大いに儲けんとして、十錢のものをば十五錢に賣り、十五錢のものを二十錢等に大いに高く賣りし爲め、店の信用を失ひ、日々に衰へ、遂には不正の品をごまかして賣る様に相なりまして御座る。されば、されば全く世間から見離され、今は如何とも致し方なく、遂には先祖代々の店も人手に渡し、今は全く困却仕り、江戸にも居たまらず、上方へても参つて一儲せんと思ひ是まで参つた者で御座る。然るところ大切な通り

藝人

手形を持たず誠に困つて御座る。(腕組をして困つた様に考へ込む)  
身共も江戸の芝居者で藝人で御座る。藝は誠に下手で御座るが怠ける事が矢張り大好きで御座る。されば舞臺ではいつも失敗して見物に笑はれ少しも上手にならず、のみならず藝に對する研究や工夫などちつとも勉強せざる爲め、後輩にどん／＼先を越され、いよ／＼役は取られ、不相變自分は馬の脚で御座る。されば誠に癪にさはり残念に思へども、自業自得の事とて如何とも致し方なう御座る。そこで江戸では逆も出世の見込はなくと考へ、上方へても参つてよい俳優にでもならんと存ずる。然し是迄のやうな考へではどうかと思ふが、又先方へ参れば参つた時の考へも御座らうと存じ是迄参つて御座る。だが大切な通り手形を忘れて誠に困つて御座る。はてさて如何致したらよか



らうかのう。(腕組をして考へ込む)

佛師 揃ひも揃ふて江戸の怠者三人が、

商人 類は友呼ぶ道づれになるとは。

藝人 不思議な縁で御座る、

三人 アハ、ハ、ハ、

佛師 (急に眞面目になり) 之はしたり、皆さん笑ふ處の段では御座らぬ、

大切な通り手形のない三人の事故、何とかよい方法を考へねばならぬでは御座らぬか。

商人 左様々々、さうで御座る。笑ふて居る場合では御座らねど、遂

その何で御座る、揃ひも揃ふて我々三人の怠け者が集まるとはあまりに妙なめぐり合せゆえ。

藝人 左様、大切な通り手形がなき事故、何とかよい工夫を講じなけ

ればならぬわい。妙案は御座るまいか。

佛師 左様、誠に困つた事ぢや、(やがて僞盲人にもし商人殿、そなたは商

法人ゆえ、お客様を胡麻化した経験上、何かよい方法を以てこの關所の役人を胡麻化する名案が御座らぬか。

商人 胡麻化すとはひどう御座るが、噂に聞けば此の役人は大變情深く、殊に病人及不具者には格別の取計らひをしてくれるといふ

事で御座る。

藝人 それはよい事を承つた。されば恚ふしては如何で御座る。三人

ともこゝで俄の不具者に化け、通して貰ふたら如何なもので御座らう。

佛師 うむ、俄の不具者、それはよい處へ氣がつかれた、(手を打つて名

案ぢや〜)



商人 それは全くの名案、流石藝人丈けあつてその考へは大したもの  
で御座る。

藝人 そのおほめの御言葉で恐縮の次第で御座るが、それより他に  
い考へも御座らぬ。

佛師 左様々々、然らば先づ第一にわたし共は偽啞人となります程に、  
そなたは(商人を指し)偽盲人におなり下さい。そなたは(藝人を指して)  
偽覺になつて下され。

商人 アハ、ハ、ハ、身共は偽盲人で御座るか、さて之は困つたわい、  
俄盲人ではどうも一寸先は闇で誠に歩行困難で難儀で御座る。

藝人 身共はあざりて御座るか、之は困つた事で御座るが、身共は下  
手でも藝人の事ゆえ、そこはうまくやる積りて御座る。

佛師 されば啞と盲と覺、それく先づこゝで一回その稽古を致さう

と存ずる、先づ身共が啞の眞似を致しませうわい。

佛師 (先づ口を指し手を振り獨音を出し啞の眞似をして) ハバ、ハ、ハ、ハ、ウ  
ンくくバ、ハ、ハ、ハ、

藝人 人々人々 うまいく、本物の啞で御座る。

佛師 今度は(商人を指して)そなた盲人の眞似をして御覽なさい。幸ひこ  
こに棒切れがある、之を杖にして。

商人 人々 (棒を受取り目をつむつて盲人の如く杖をつきつ)この程度で如何で御座る。  
佛師 素敵々々、その調子く、今度はそなた(藝人を指して)覺の眞似を  
して下され。

藝人 人々 心得ました、片足を深く拄げ片足で跳ねるやうにしてどうで御座る、これ  
では……。

佛師 さすがは藝人で御座る。正しく眞實のみざりて御座る。それで







藝 人 其の處を是非枉げて願ひする儀で御座ります。實は我々三名は江戸の者で、先般の大火の爲め大なる不幸に逢ひ悉く困却致し、住みなれた江戸を後に上方へ參る者で御座ります。

太郎太夫 うむ、大火に逢つたと申すか。

商 人 左様で御座ります。わたしなどはそれが爲め猛火を浴びこの通り失明致して御座ります。

藝 人 わたしは二階より飛び落ちてこの通り生れもつかぬ躰となりまして御座ります。

太郎太夫 うむ、それは可哀な事ぢやつたのう御同役。

次郎太夫 左様々々、氣の毒な事と存じます。

藝 人 また之なる啞は、親兄弟焼死致し、寄邊なき身の上ゆえ、我々同様大阪の遠縁の者へ參る者で御座ります。

佛 師 手眞似して頓首しつゝバ、バ、ウン／＼バア、バ、バ、

商 人 何卒憐と思召しまして御通しの程を偏に願ひ申します。

藝 人 (頓首して) 願ひ申します。

三郎太夫 然らば其方達片輪者三人、長い道中如何にして是迄參つたるか、又この先の長道中如何にして行くのか？

藝 人 不具者三人互に相扶け相いたはりこれまでやう／＼參つたので御座ります。

太郎太夫 何ツ、不具者各自が相扶け相いたはり、うむ、いゝ心掛けぢや、

美談ぢや、感心な者達ぢや。

次郎太夫 下々の者の美はしい心持に拙者も感心致して御座る。

三郎太夫 牛の歩みも何とやら、といふ事も御座るが、是なる片輪者三人も牛の歩みの苦勞の月日を重ねてこゝまで來た事は全く感服の



到りて御座る。

商人 御ほめの御言葉に預かつては恐縮の到りて御座りまするが、それは、難儀を重ねまして御座りまする。

藝人 我々三人身心一體となつて氣をはげまし合つて是まで参りましたが、その苦勞は並大抵では御座りません御座りまする。

太郎太夫 さうぢやのう、近頃感泣を催す美談ぢや、のう各々、同志役人をかへりみる)

次郎太夫 全くて御座る。彼等の如き人情美は此の今の世には珍しう御座る。

三郎太夫 感服の到りぢや、そこでこれ、三人の者、それでは其方達が三人身心一體となつて是迄歩いて來た、その歩いて來た様子を今こゝで我々に見せて貰へまいか。

商人 それはいと易い事で御座ります。之からもこのお關所を通らして頂いて何百里といふ里程を旅する事で御座いますので、その苦勞の程も是非御覽願ひたいと存じます。

(先づ盲は覺を背負ひその手を啞が曳いて歩き出す)

藝人 先づ恁うして歩くので御座りますが、わたしはこの盲人の背に乗つて樂をさして頂くので、その恩には涙を以て感謝してゐるので御座りまする。

商人 これ、何を申すのぢや、その心配はいらぬと毎度申してゐるではないか、わたしは盲人でも力は人一倍あるのぢやから、心配しないで之から先も黙つてわたしの背に負はれなされ。

役人一同 (之を見てすつかり感心して) うむ、感心な者ぢや。

太郎太夫 然しうまい事を考へたものぢやな、先づ目の見へる啞が先頭に







(三人は顔見合せうまくいつたと合圖する)

役人 (再び書見をする)

盲人 (大きく目をあき) アハ、、、。

佛師 (フ、フンと笑つて大口あいて) アハ、、、。

藝人 (すつくと立上り) アハ、、、。

(三人は急いで上手へ退場)

—— 少し間 ——

馬子三吉 (上手より急いで登場 關所の内に這入り性急にもし〜 お役人様〜)

太郎太夫 (やゝ驚き顔に) おゝ、お前は三吉か、何事ぢや、性急にあわてゝ。

三吉 お役人様に申し上げます。只今このお關所を通つた三人連れが御座りませぬか？

次郎太夫 あつた〜、不具者三人ぢや、それが如何致した？

三吉 その三人は大悪者で御座ります。

三郎太夫 悪者とは怪しからん。あれは誠に世にも珍しい感心な者達ぢやぞ。

三吉 それはとんでもない、偽者で御座ります。私が馬を曳いてのかへりみち、あの三人の話を聞いたので御座ります。

太郎太夫 (やゝ怒り氣味にて) 何ん何んと申した。

三吉 關所の役人なんか胡麻化す事はお茶の子さい〜だと一人が云ひますと。

次郎太夫 その次は何と申した。

三吉 さうだ〜、役人などを化すのは朝飯前だといひました。

三郎太夫 (怒つて) 何ッ！ 朝飯前？ 實に怪しからん、それから何と申した。

三吉 嘘を誠しやかに申したら役人衆は我々をすつかり信用して、何



んだかんだとほめた揚句、わけなく關所を通してくれた、とフ、  
フンと鼻で笑つて御座りました。

太郎太夫  
フ、フンと鼻で笑ふて居た。扱は誠に憎ツくい奴。

次郎太夫  
それで三人共片輪者ではなかつたか？

三吉  
片輪處かどれもみなしやんくとした足達者なもので御座りま  
した。

三郎太夫  
何ツ、しやんくとして足達者な奴。

三吉  
さうですともく。

太郎太夫  
天いに怒つてうむ、さては計られたか、残念ぢや、無念ぢや。さ

れば各々、之より直ちに彼等三人を追ひ、からめ捕り嚴罰に。

次郎太夫  
左様々々、寸時も早く。

三郎太夫  
うむ、残念千萬。

太郎太夫  
それツ、各々逃がすなく。

次郎太夫  
やるまいぞく。

三郎太夫  
(役人衆は直に偽者三人を追ふて退場)

注意 時間の都合でこゝで閉幕してもよろしい、が時間が許すなら次を續けて頂き度い。

—— 少し間 ——

(偽者三人、役人に引立てられて上手より登場、役人の前に引据ゑられて全く意氣衰へ低頭平身再三今後は決して悪事はしないと哀願する)

太郎太夫  
天いに怒つて其方共は誠に憎みても餘りある悪人共ぢや。今嚴重

な處罰を加へるゆえ、左様心得ろ。

次郎太夫  
其方共が當關所をいくらいつはつても、悪事の露見しない事は  
ないぞ。



三郎太夫 さア立てツ。(偽者の後に廻り棒を以て打たんとするとき)

守之頭 (下手より登場、殿かにこれく) 三郎太夫、暫しその刑を待たれよ。

三郎太夫 (之を止めて) ハ、ハツ。

守之頭 某最前より彼等偽者三人の様子をよく観察するに、今は全く改心したやうに思ふ、此度は許してつかはしてよろしからう。

役人一同 ハ、ハツ、それは誠に御情深き御取計らひ。

太郎太夫 之れく偽者三人、只今の殿様の厚き思召し有難く心得ろ。

偽者三人 (改心の情を面に表して) ハ、ハツ、誠に有難う存じます。以後決して

悪事を働きませぬ、又契つて眞人間になります。

守之頭 よろしい、其の方達の心底も相判つた。許す故早々此の關所を

通れ、よろしいか。

偽者三人 (再三の高恩に感謝してすくくと退場)

守之頭 (その後姿を見送つて朗かに笑ひ) 各々方何とい、氣持では御座らぬか。

彼等の喜ぶ顔を見ると某は實にい、氣持ぢや、アハ、ハ、ハ、

役人一同 いつも乍ら殿様の慈愛に溢れましたる御取計らひ、感泣に咽ぶ

次第で御座ります。

守之頭 情は人の爲ならずぢやよ、アハ、ハ、ハ、

役人一同 (恐入つたる如く感激して) ハ、ハツ。(頓首する)

守之頭 アハ、ハ、ハ、い、氣持ぢや。

朗かな場面然も感激の場面の裡に……

—幕—



1 ユウマノマゴサシカハイマゴ  
 2 ななつやまひかくれて  
 3 マーハマゴウタホシヅキ

1 コウマノオスズハキンスズ  
 2 このつこのやまくらくなる  
 3 コーウマボカボカユレルカゲ

1 トーホイオツカヒヤマノミチ  
 2 んがりこやまにつきかてて  
 3 ールノヤマミチカハリミチ

1 トントントーゲニスズガナル  
 2 トんとんとーゲニスズガナル  
 3 トントントーゲニスズガナル

1 シヤラリコシヤンシヤラリコシヤン  
 2 シヤラリコシヤンシヤラリコシヤン  
 3 シヤラリコシヤンシヤラリコシヤン

1 シヤンシヤンシヤラリコスズガナル  
 2 シヤンシヤンシヤラリコスズガナル  
 3 シヤンシヤンシヤラリコスズガナル



能狂言兒童劇・種目

- 一、館なめ地蔵 (四・五年程度)
- 二、鼠の嫁入り (三・四年程度)
- 三、箱根の關所 (五・六年程度)
- 四、つんぼと盲 (五・六年程度)
- 五、旅は道連れ (三・四年程度)
- 六、化け案山子 (三・四年程度)
- 七、四人轉太 (五・六年程度)
- 八、狐の深 (四・五年程度)
- 九、野原の醫者 (四・五年程度)
- 一〇、思返し (三・四年程度)
- 一一、國境争ひ (五・六年程度)
- 一二、三人旅 (四・五年程度)

定價各金五拾錢  
送料各金十四錢

仔馬と馬子さん

佐々木綠亭 作詞  
長谷基孝 作曲

快活に

The musical score is written in 2/4 time with a key signature of one flat (B-flat). It consists of three systems of music. Each system includes a vocal line with lyrics (represented by circles) and a piano accompaniment with treble and bass staves. The tempo is marked '快活に' (Allegretto).

昭和十一年十二月十六日印刷  
昭和十一年十二月二十日發行



能狂言兒童劇 定價金五拾錢

著者 佐々木 綠亭

表作權者 東京市日本橋區本町四丁目十一番地 林 甲子太郎

印刷者 東京市小石川區對馬町百〇八番地 齋 藤 梅 吉

印刷所 東京市小石川區對馬町百〇八番地 三立舎印刷所

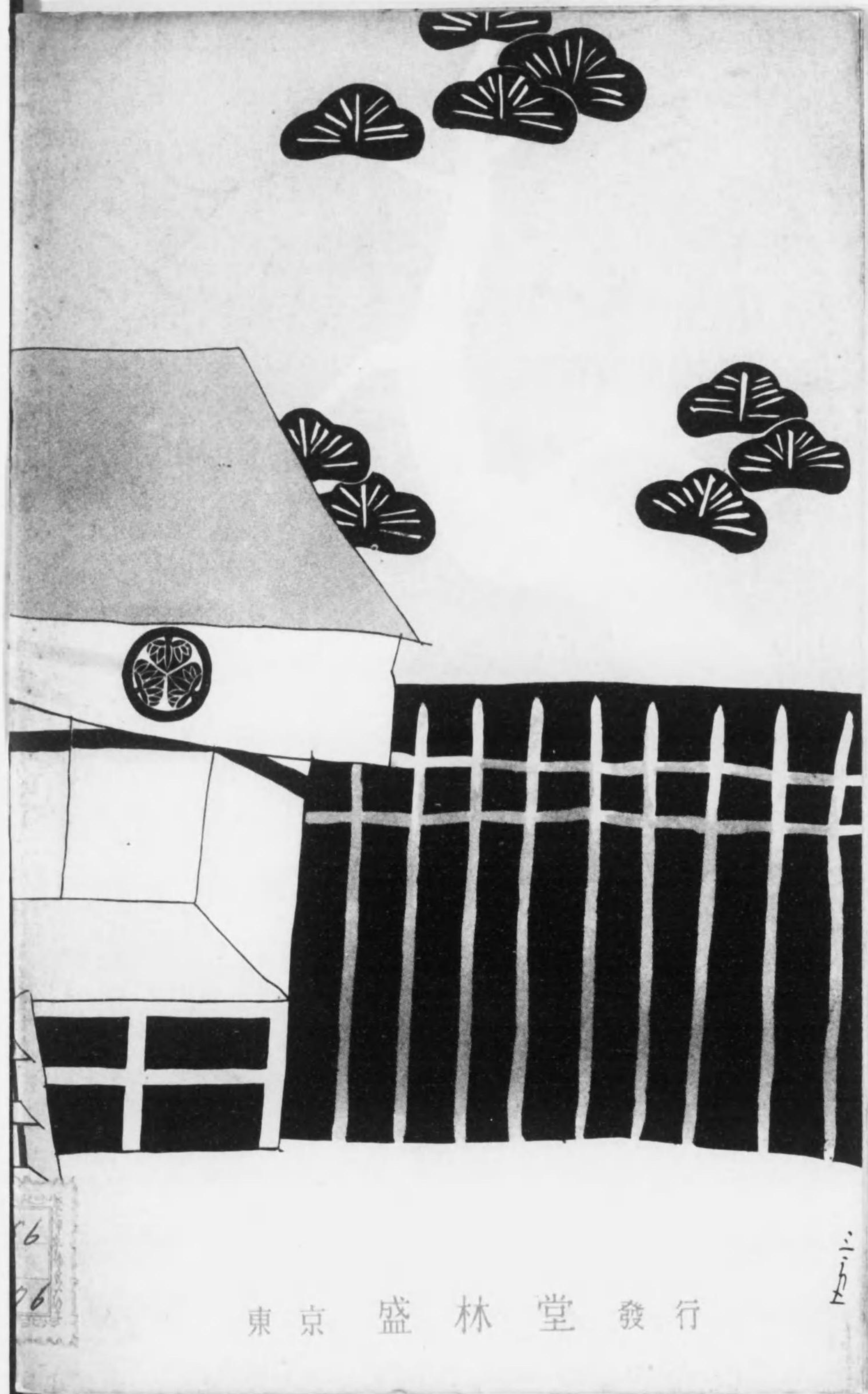
發行所 東京市日本橋區本町四丁目十一番地

盛林堂書店

電話東京一八四六番  
電話日本橋〇二四一番



終



東京 盛林堂 發行

6  
26

11